博士（文学）　申　　寅　燮

学位論文題名

有島武郎研究

学位論文内容の要旨

〔形式〕本論文は凡例、目次、序、第1～4章、結、付録、参考文献表により構成され、A4判、縦書き、全207頁である。1頁は1400字、よって400字原稿用紙に換算して725枚に相当する。

〔内容〕著者まず「序－有島武郎研究序説」で、有島の作品が、形式面では多様なコミュニケーション構造を実験していること、内容面ではコミュニケーションの阻害によって追い詰められる人間の悲劇を描いていることに注目する。従来の研究は、主人公の悲劇を、近代的な自我に目覚めた人間、または野生人の本能的な社会への反抗として、主題論的に把えることが多く、しかも形式面に注意を払うことはほとんどなかった。その点で著者の着眼は新しい研究的視野を拓くものと言える。著者はその着眼を方法化すべく、「作家」と〈生身の作者〉を区別し、前者を「作品を読む過程で読者のなかに作り出される観念」と定義する。またそれと対概念たる「読者」については、①同時代の〈生身の読者〉、②有島が予想した読者、③虚構世界のなかで自分からコミュニケーションを試みる、虚構のテクストの読者、④テクストに登場する聞き手、または〈テクスト内の読者〉、に分けた。①②は実体論的な概念で、従来はこれらと〈生身の作者〉を対応させる研究が主流だったが、著者は③④というテクスト構成的な概念をもって考察をすすめてゆく。この概念はW・イーザー著、轡田収訳『行為としての読書』（1982）などの受容美学理論に学んでいるが、イーザーがほとんど注意を払わなかった④の機能からコミュニケーション構造を把えようとした点に、本論の特徴がある。

第一章「有島武郎文学の鳥瞰－研究状況と展望－」では、半世紀に及ぶ有島研究を、有島生存時の「〈作家論〉の原型」と呼ぶべき評論類や、戦後『近代文学』派によって始まった作家論的研究の動向をテーマ別に細かく検討して、現在この傾向の研究が衰退した理由は資料整備がほぼ終わったことと、近代的自我史観のモチーフが薄れたことにあると指摘する。その上で作品別の研究史を整理し、表現論的な研究への移行を確認したが、個別には優れた表現分析がみられるものの、有島の主要な作品を一貫した視点と方法で把握した研究はまだ現われていないと批判して、自己の方法を位置づける。本論文巻末の参考文献表で示されたごとく、有島研究関係の220篇あまりの論文と約60点の研究書を精査して、各時期の文学観を検討しており、本章は現時点において質量ともに最も優れた研究史的研究たりえている。

第二章「『かんかん虫』・『カインの末裔』」においては、『かんかん虫』のコミュニケーション構造が、物語内容たるイフヒム・カチャの恋愛譚と、それを語るイリイッチの話と、さらにそれを解釈し読者に伝達する「私」の語り、という三重構造となっていることを指摘し、「多重

的な声」と呼んだ。この用語はM・バフチンの「ポリフォニイ（多声）」に示唆されているが、バフチンの用語が文体論的概念であるのに対して、著者の用語はむしろ伝達関係の概念であり、字が書けない自分や労働者を〈虫〉と自嘲するイリイッチの語りと、洗練された表現能力をもって伝える「私」の文体との差異の分析に有効に機能している。その差異のなかに「私」のイリイッチに対する親近と違和の葛藤を見出だし得ただけでなく、有島が労働者の問題を読者に伝えようとする際の基本的な構造が析出されたからである。有島には『或る女のグリンプス』や『お末の死』など、周囲から緘黙を強いられて破滅する人間を描いた作品が多いが、著者は『カインの末裔』をその代表に選んだ。この主人公、仁右衛門も字の書けない渡り者の農夫であるが、イリイッチと異なり、人間の世界に対する根深い違和感のためコミュニケーションの閉塞状況に陥っている。ただ、『かんかん虫』が１人称の語り手の伝達形式だったのに較べて、著者は、この作品の「透明な語り手」が、自身の感情・欲望を対象化できない仁右衛門の内面に自由に立ち入り、解釈し意味づけて読者に架橋している点に注目し、前作からの発展と評価する。解釈された「内面」の近代人性を強調しすぎたきらいはあるが、従来の仁右衛門＝野生人という把え方に対して、この作品が現代人を惹きつけた理由を伝達構造の面から明らかにした功績は大きい。

第三章「二人称の呼びかけ」で取り上げた『宣言』は、ＡとＢという友人の間に交換された書簡を列挙した形式、『小さき者へ』は妻を失った「私」が幼い子供達に呼びかける手紙の形式をとっている。つまり前者では、登場人物が語り手と④の読者の立場とを互いに交換してゆくコミュニケーションの間に誤解、断絶、和解のドラマを生むわけだが、後者の場合の受け手はまだ幼い子供であるためコミュニケーションの成就は未来に延期されざるをえない。著者はその独特な構造を指摘した上で、③の読者がコミュニケーションのなかに立ち入り、発信・受信の緊張関係を引き受け、登場人物には意識化できない統合的な意味を見出してゆく過程を明らかにした。『生まれ出づる悩み』はコミュニケーション関係をさらに複雑に組み合わせた作品で、文学者の「私」が、周囲とのコミュニケーションの欠如を「自然」の表現で補償しようとする「君」の行動を、「君」を④の読者とし、「君」を主語とする想像的二人称の文体で描く。その特異な文体が③の読者にリアリティを持ち得た所以を解明した。

第４章「緘黙する葉子を読む」は有島の代表作『或る女』の表現構造を、身体論やマスメディア論の視点をも用いて総合的に解き明かそうとした力作論文である。その要点を、コミュニケーション構造の分析に絞って紹介すれば、ヒロイン葉子は私的なコミュニケーションにうまく対処できずに、周囲への反抗を重ねてゆく反面、汽車のホーム、汽船のサロンなど、近代の新しい公共的空間を自己顕示の劇場として利用し、不特定多数の他者に解釈不可能なメッセージを発信し続ける女性だ、と著者は指摘する。従来の研究は反抗と自己顕示の面から「新しい女」の問題を論じてきたが、著者は、葉子の内面を解釈し意味づけながら伝達する「透明な語り手」の機能にも注意を促す。その上で、③の読者の立場から、葉子自身の自己解釈と、身体的メッセージと、語り手の意味づけとの矛盾を引き受け、立体的な葉子の像を統合する読みを提案した。「他者志向的に生きざるをえない限界を『運命の不思議な力』という脆弱な内部論理でしか説明できない女」が、近代のメディアを利用しようとして、逆にメディアに追い詰められた悲劇、という把握は新たな地平を拓いたものと評価できる。

「結－『宣言一つ』の言説」の『宣言一つ』は、有島が、当時の労働運動の知識人無用論に直面して、自分の限界を語り、文学者や思想家の間に大きな論争を惹き起こした評論である。従

来の研究は、彼の思想的な行き詰まりや有島農場の解放と結びつけることが多かったが、著者は「私は第四階級とは何らの接触点を持ち得ぬ」「第四階級以外の階級が発明した文字と、構想と、表現法をもつて」という箇所に注目して、有島の民衆観は階級的というより、創作の受け手として把えられていたと指摘する。評論の読者を問題にする場合、①や②の読者論を繰り込まざるをえないが、コミュニケーション構造の面からこの評論を把え、既に『かんかん虫』の「私」に孕まれていた問題がここに顕在化したのだ、という分析は創見と言える。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　亀　井　秀　雄

副　査　　教　授　　灰　谷　慶　三

副　査　　教　授　　長　尾　輝　彦

副　査　　助教授　　中　山　昭　彦

学位論文題名

有島武郎研究

本委員会は上記の申請論文を審査するに際して、まず基礎的な作業面と内容面に分け、新しい研究方向を拓くものと評価できるか否かを検討することにした。すなわち基礎的作業としては、有島の作品のヴァリアントの検討と使用テクストの選択の適否、従来の研究史の把握と参考文献の理解度、文献引用の正確さ等について、また内容面としては、全体の構成と論理の展開力、各章ごとのテーマと展開、キーワードの概念の厳密さと一貫性、有島研究に必要な文学史的知識、学術研究としての達成度等についてである。以下、それらの検討結果と、委員会の評価を、要点を絞って説明する。

本研究論文は、現在最も本文校訂に関して信用度の高い、筑摩書房版『有島武郎全集』を選んでいる。これは、研究の目的と方法が文学テクストにおけるコミュニケーション構造の把握にあり、引用の統一を期したためである。後述するように、著者は有島に関する評論類とともに作品の初期形態を調査して、全集版の表記との異同を確認し、必要に応じて、註その他でテクスト解釈の差異の可能性に言及している。上の「本文」選択は、文献学的研究を踏まえた上での自覚的な選択であったと判断できる。また研究史に関しては、有島が文壇に登場して以来の220編あまりの研究論文と、約60点の研究書を精査し、さらに有島研究に不可欠な「木下杢太郎・武者小路実篤論争」「自然主義前派論争」「生田長江/安倍能成・阿部次郎論争」「有島武郎/武者小路実篤論争」について、新資料を発掘して新しい解釈を示すなどの成果を挙げた。文学研究においては、「研究史の研究」それ自体が独立した研究として評価されるほど重要な領域であるが、著者は半世紀に及ぶ研究動向を跡づけて、各時期における文学観の変遷をも整理・検討しており、現時点において最も精密で質の高い研究史として評価できる。その他、文学研究の理論書や明治・大正の思想史や文学史

の文献についても幅広く眼を通し、資料の引用は厳密かつ適切であった。

次に内容面についてであるが、著者はまず「作家」と〈生身の作者〉とを区別し、前者を「作品を読む過程で読者のなかに作り出される観念」と定義する。またそれと対概念たる「読者」については、①〈生身の読者〉の他に、②有島が予想した同時代読者、③虚構世界のなかで自分からコミュニケーションを試みる、虚構のテクストの読者、④テクスト内に登場する聞き手、または〈テクスト内の読者〉、に分けている。①と②は実体論的な概念であり、従来はそれを〈生身の作者〉に対応させる伝記的研究が主流であったが、著者は③と④のようなテクストの構成概念を用いて、有島の多彩な文学的コミュニケーションの実験を解明してゆく。例えば『小さき者へ』は、妻を失った「私」が幼い子供達に語りかける、二人称呼びかけ形式のテクストであり、子供達が④に当たる。ただ子供達は「私」の語る内容を理解できるだけ知的・精神的に成長していない。その意味で「私」のコミュニケーションの成就は未来に延期されることになるわけだが、読者はその時間のずれに立ち入り、テクスト内の受け手たる子供達の側に立ってメッセージを先取りしつつ、視点を「私」の立場に集中する。著者はこのように内在的なコミュニケーション関係と、読者の能動的なメッセージ統合の機能を分析方法として、登場人物が互いに語り手と「テクスト内読者」の立場を交換する書簡体小説『宣言』や、『生まれ出づる悩み』などの複雑なコミュニケーション構造を解明した。

問題は『かんかん虫』や『カインの末裔』、『或る女』のように、「テクスト内読者」を持たない作品をどう把えるかであるが、著者はコミュニケーションの阻害に苦しむ主人公のコミュニケーション志向を、言語から身体的メッセージに至るまで精密な分析をし、③の読者が語り手の伝達する以上の意味を統合してゆく過程を明らかにする。「結」の『宣言一つ』は評論であり、②の読者を想定しなければならない点で、テクストの性格が異なり、分析がやや表面的であった弱点は否めない。だが有島の思想的な行き詰まりとする従来の見方に対して、それをコミュニケーション構造の面から把え返した功績は大きい。

以上のごとく、著者は自己の概念と方法を一貫して駆使し、有島が極めて意識的に多様なコミュニケーション構造を実験してきたという、従来見落とされていた特徴を明らかにしたこと、さらに『小さき者へ』や『生れ出づる悩み』のなかに発見した「想像的二人称の語り」という独自な概念は、これまでの理論にない新しい視点を拓く概念であり、画期的な研究と評価できる。